

早く 告りや いいのに。

— 奔放な幼なじみと、
何も言えない俺 —

著:Pon



大学の講義も終わり、どこへ寄るでもなくアパートへ帰る。

なぜか、女の子も一緒に。

「……なんか当たり前みたいに俺の部屋来てないか？」

隣を歩く里美に言うと、彼女はきょとした顔でこちらを見た。

「今さらどうしたの？」

それより、とでも言うように視線を前へ戻す。

「昨日の漫画の続き、貸して」

「それ目的かよ」

「うん」

悪びれもしない。

アパートに着くと、里美は俺の後ろについて階段を上がり、俺が鍵を開けるのを当然のように待っていた。

扉を開ければ、俺より先にするりと玄関へ入る。

「お邪魔します」

「絶対そう思っていないだろ」

「思ってる思ってる」

靴を脱ぎながら適当に答え、そのまま勝手知ったる様子で部屋の奥へ向かっていく。

まるでここが、自分の部屋でもあるみたい。

俺もいちいち止めることなく、その後続いた。

黒く背中まである髪をひとつに束ねると、里美はいつもの座椅子にどっかと腰を下ろした。

そのまま、こちらへ片手を伸ばす。

「ん。漫画」

「自分で取れ」

「えー」

そう言いながらも、手は引つ込めない。

まるで俺が渡すのが当然だともいうように、里美はじっと待っている。

「お前な……」

仕方なく昨日の続きの巻を取って渡すと、満足そうに受け取った。

「ありがと」

ぱら、とページを開く。

「あ、あとコーヒーがいいな」

「ここ喫茶店じゃないんだけど」

「知ってるよ？」

里美は漫画から顔すら上げなかった。

「自分で淹れろ」

「えー」

「えー、じゃない」

テーブルの向こうで、里美は座椅子に深く腰を沈めたままページをめくる。

ぱらり。

聞いているのかいないのか。

いや、たぶん聞いている。

その証拠に、しばらくするとまた口を開いた。

「康太のほうが上手いじゃん」

「インスタントに上手いも下手もあるか」

「あるよ」

即答だった。

「康太が淹れたやつの方がおいしい」

「……………」

なんだそれ。

そう思いながら立ち上がっている時点で、たぶん俺の負けなのだろう。

台所へ向かい、棚からいつものマグカップを二つ取る。

ひとつは俺の。

もうひとつは――別に里美専用というわけではない。

ただ、あいつが来ると決まってそれを使うだけだ。

いつからそうなったのかは覚えていない。

湯を沸かしている間にも、背後からページをめくる音がする。

ぱらり。

ぱらり。

「砂糖は？」

「いつもので」

「知らねえよ」

「知ってるくせに」

振り返ると、里美はやっぱり漫画を読んでいた。

こっちなんて見てもいない。

なのに妙に腹が立つ。

——というより。

こういうのを、俺が全部覚えていることが少し腹立たしい。

砂糖は一本。

ミルクは入れない。

熱すぎるとすぐ飲めないと言って文句を言うから、ほんの少しだけ湯を少なめにする。

そんなものまで、いつの間にか覚えてしまった。

「ほら」

テーブルへカップを置く。

「ありがとう」

ようやく漫画から片手だけ離して、里美が受け取った。

ふう、と二度ほど息を吹きかける。

それから一口。

「うん」

「何だよ」

「今日もおいしい」

「だからインスタントだって」

「でも康太が淹れたやつじゃん」

それだけ言うと、また何事もなかったように漫画へ戻っていく。
ぱらり。

「……………」

こういうところだ。

こういうところが、こいつはずるい。

本人はたぶん、何も考えていない。

俺が淹れたコーヒーが好き。

たぶん、それだけ。

——それだけなのに。

「何？」

「別に」

「変なの」

里美はカップを片手に、またページをめくった。

背中まである黒髪を後ろでひとつに束ね、もうすっかり漫画の世界へ旅立っている彼女は、里美。

里美とは、物心がつく前からの付き合いだ。

虫取りもした。

かくれんぼもした。

夏になれば一緒に水遊びをして、家族ぐるみで出かけることだった。珍しくなかった。

風呂だって、かなり長い間一緒に入っていた。

「……そういや、風呂まで一緒には入らなくなったな」
なんとなく昔を思い出し、口にする。

「ん、そだね」

里美は漫画から目を離さないまま答えた。

そのままテーブルの上にあったポテトの袋を手に取り、
バリリ。

勝手に開ける。

「おい、それ俺の――」

言い切るより先に、里美がポテトを一本つまんだ。

「ってかさ」

ぱり、と齧る。

「康太が嫌がって、入らなくなったんだよ？」

「俺が？」

「そう」

相変わらず、視線は漫画に落ちたままだ。

「『いつまでも女と一緒に入ってられるか』って」

「……そんなこと言ったっけ」

「言った言った」

ぱらり、とページをめくる。

「でも、なんだかんだ中学入る前くらいまでは一緒に入ってたよね」

そこでようやく、里美が漫画から顔を上げた。

少しだけ口元を緩め、愉快そうにこちらを見る。

「結構長かったよね、わたしたち」

「……そんな長かったか？」

「長かったよ」

「覚えてない」

「うそ。絶対覚えてるでしょ」

くすつと笑うと、里美はまた何事もなかったように漫画へ視線を

戻した。

俺だけが、なぜか少し昔のことを思い出していた。

そう。

実は、よく覚えている。

お互い、少しずつ身体が変わっていった頃のことを。

昨日まで何とも思わなかったはずなのに、ある時から、どうしても里美を意識するようになった。

幼なじみだ。

昔から一緒にいる里美だ。

そう思おうとすればするほど、かえって女の子として見てしまう。

一緒に湯船に浸かっているあの時間が、どうにも耐えられなくなつた。

だから、俺からやめた。

「……わたしは今でも一緒に入れるけどね」

「は？」

里美が、ぼそつと付け足した。

最後までお読みいただき、
ありがとうございました。

この物語が、
ほんの少しでも心に残れば
嬉しいです。



著者

Pon | 残響書庫



— 作品や日々のことはこちら —



note (作品・文章)
note.com/sorasora1515

小説やエッセイなど、
作品をまとめています。



Threads (執筆中のこと)
[@pon222115](https://www.threads.net/@pon222115)

執筆の裏側や日々のことを
気ままに綴っています。



X (短い文章・お知らせ)
[@sorasora5755](https://twitter.com/sorasora5755)

短い文章やお知らせを
中心に投稿しています。



Substack (長編・その他)
substack.com/@ponmemo

長編や読み物を中心に
公開しています。



応援していただけることが、何よりの励みになります。
またどこかで、あなたに物語を届けられますように。

Thank you!

© Pon | 残響書庫

本作品の無断転載・複製・アップロード・公開を禁じます。
すべての権利は著者に帰属します。